

近世宿場町四日市遺跡の貝類利用

石丸恵利子

1. はじめに

四日市遺跡は、東広島市を中心に広がる標高約 200m の西条盆地に所在し、沿岸部から直線距離にして約 20 km 内陸に位置する中世から近世、近代の遺跡である。内陸部にありながら、西条盆地には古くは旧石器時代や縄文時代から、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世の各時代の遺跡が多く存在する。日々の生活を支えた資源を豊富に保有する自然環境の良さに加え、中世山陽道や近世西国街道などの主要街道がこの地を通り、多くの人々ともものや文化が行き交う交通の要衝地であったことを知ることができる。

四日市宿については、『藝藩通志』に次郎丸村を通る西国街道やその両側の建物が描かれ、『四日市街路家並絵図』には蔵などの建物跡や町割りが描かれており、その存在が知られていた(復刻藝藩通志刊行会 1963、東広島市教育委員会 2007)。平成 10 年度(1998)から 17 年度、西条駅前土地区画整理事業に伴って発掘調査が行われ、調査区内で近世の宿場町であった西条四日市宿の中心部の具体的な様相が明らかとなった。発掘調査によって、西国街道の位置や当時の町割り遺構、井戸や埋桶、醸造遺構などが検出されている(石垣ほか 2004・2005、出野上 2006、木谷 2006)。

当時の食事の内容や資源利用の様相を物語る動物遺存体も多く残されており、これまでにマダイやスズキ、ブリ属、ヒラメなどの海産魚類や、スッポン、ニホンジカなどの出土が報告されている(石丸 2007)。それらに加え貝類も多く確認されており、本稿ではその種類を報告し、四日市宿(宿場町)での貝類利用について考察する。

2. 出土貝類の種類

確認された資料は約 110 点で、海産貝類は巻貝 4 種、二枚貝 10 種、淡水産貝類は巻貝と二枚貝各 1 種の、計 16 種であった(第 1・3 表)。埋桶や土坑、井戸などの近世から近代までの遺構や包含層から出土したものである。以下、種ごとにその概要を述べる。各貝類の生息域や生態、料理法などの情報については、奥谷(2000)、紀平ほか(2003)、望月(1997)、中村(2001)を参照した。貝類の部分名称については、第 1 図に示した。

【海産貝類】

イボキサゴ 土坑から 1 点出土している。殻幅 14.2 mm である。イボキサゴは、内湾の潮間

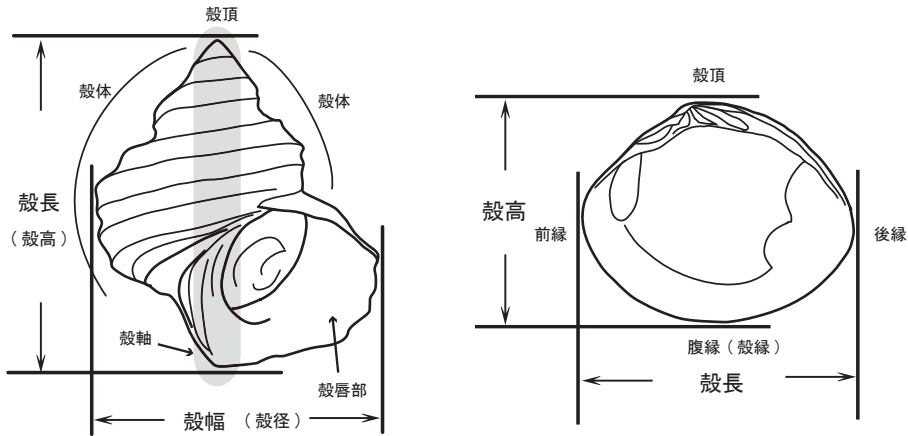
第 1 表 四日市遺跡出土貝類種名一覧

	綱	目	科	種
海産貝類	腹足綱 Gastropoda	古腹足目 Vetigastropoda	ニシキウズガイ科	イボキサゴ <i>Umboonium moniliferum</i>
			サザエ科 Turbinodae	サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i>
		盤足目 Discopoda	タマガイ科 Naticidae	ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i>
	二枚貝綱 Bivalvia	新腹足目 Neogastropoda	アツキガイ科 Muricidae	アカニシ <i>Rapana venosa</i>
			フネガイ目 Arcidae	アカガイ <i>Scapharca broughtonii</i>
		カキ目 Ostreoida	イタヤガイ科 Pectinidae	イタヤガイ <i>Pecten albicans</i>
			イタボガキ科 Ostreidae	マガキ <i>Crassostrea gigas</i> イワガキ <i>Crassostrea nippona</i>
		マルスタレガイ目 Veneroida	バカガイ科 Mactridae	ミルクイ <i>Tresus keenae</i>
			マテガイ科 Pharellidae	マテガイ <i>Solen strictus</i>
			マルスタレガイ科	カガミガイ <i>Phacosoma japonicum</i> アサリ <i>Ruditapes philipinarum</i> アケガイ <i>Paphia vernicosa</i> ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
淡水産貝類	腹足綱 Gastropoda	中腹足目 Mesogastrophoda	カワニナ科 Pleuroceridae	カワニナ <i>Semisulcospira libertine</i>
	二枚貝綱 Bivalvia	イシガイ目 Unionoida	イシガイ科 Unionidae	マツカサガイ <i>Inversidens japonensis</i>

* 種名標記については、奥谷ほか（2000）、紀平（2003）に従った。

帯から水深 10m までの砂地や砂泥底に生息し、容易に採集することができる。現在の瀬戸内海でも一般に見ることができ、塩ゆでや煮るなどして、食することができる。

サザエ 埋桶や土坑などから、殻体と蓋が 13 点出土している。いずれも棘のないもので、殻長 80 mm 以上の大きなものが確認されている。最も大きなものは殻長 96.1 mm を測る。蓋の短径は 33 mm から 36 mm のものが認められ、これらの値から殻長を復元すると、88 mm から 95 mm の大きな個体に復元することができる。サザエは、潮間帯下部から水深 20m までの岩礁に生息し、現在でもなじみのある食材である。刺身や壺焼きなどとして食される。サザエの棘は呼吸のための水の出入管であるが、棘のあるものかないものが存在し、棘のあるものにおいても長さや密度は変異が激しいとされる。棘の有無は、環境要因に支配された非



巻貝：サザエ

二枚貝：ハマグリ（右殻）

第1図 貝類の部分名称

遺伝的な変異であるとされる（奥谷編著 2000）。広島城跡広島法務総合庁舎地点（以下、広島城法務地点）では、棘のあるものとないものの両者が出土している（石丸 2009）。

ツメタガイ 1点のみであるが溝から出土している。ほぼ完形で、殻長 36 mm、殻幅 67 mm の個体である。無害で食用は可能であるが、積極的に食された種かは不明である。広島城法務地点では 34,000 点の貝類が確認されているが、そのうちツメタガイは 8 点のみである（石丸 2009）。広島城跡太田川河川事務所地点（以下、広島城太田川地点）では、8,000 点中 5 点確認されている（黒澤 2006）。ツメタガイは内湾の潮間帯から水深 50m の細砂底に生息し、ほかの貝に歯舌で孔をあけて肉を食べる貝である。海岸で殻長付近に孔のあいた貝殻が打ち上げられているのを目にすることがあるが、これはツメタガイなどの肉食性の貝によってあけられ、中の肉が食べられた死貝である。

アカニシ 土坑や埋桶、石組み井戸、溝などから出土し、破片を含めて 35 点を数える。本遺跡出土貝類の中で最も多く確認されている種である。小さなものは殻幅が 43 から 50 mm 程度で、90 から 120 mm の大きな個体も確認されている。殻幅 75 から 100 mm のものが最も多く出土している。アカニシは内湾の干潟や水深 30m 以浅の砂泥底に生息し、カキやハマグリなどの二枚貝を食べる肉食性の貝である。刺身や串焼き、煮つけやおでんだねなどにして食べることができる。殻が丈夫なことからよく残っていた可能性はあるが、現在ではほとんど見ることができない殻幅 100 mm 以上の大きな個体が確認されている点が注目される。

広島湾沿岸の遺跡では、縄文時代から一定量認められるがあまり多いとは言えない。広島城関連遺跡においても全体の1%程度の量が認められる。

アカガイ 土坑から1点出土している。殻長90mmの大きなものである。このほか、破片のため断定はできないが、アカガイと思われる破片が1点確認されている。アカガイは、内湾の水深5から50mの砂泥底に生息し、刺身や酢の物などの生食に向く。特に、すしだねとして人気があり、重宝される種である。アサリやハマグリより深場に生息することから、当時大量に入手できる種ではなかったと考えられる。広島湾沿岸地域に所在する遺跡では、広島城法務地点で20点あまりが確認されているに過ぎず、古くは、縄文時代の比治山貝塚（縄文後期から晩期）や中山貝塚（縄文晩期から弥生中期）などでは確認されていない。備後地域においては、馬取西貝塚（縄文後期主体）と木ノ庄貝塚（縄文後期）、草戸千軒町遺跡（中世）でアカガイの出土が認められる（稲葉1963・1971、岩本ほか1995）。

イタヤガイ 埋桶や井戸、池などから9点が出土している。強く膨れる右殻と扁平な左殻の両者が確認され、殻長80から100mmの大きなものが主体を占める特徴がうかがえる。イタヤガイは、水深10から100mの砂底に生息する。広島県内では、広島城法務地点や広島城太田川地点で一定量出土している（石丸2009、黒澤2006）が、縄文時代など古い時代の遺跡では確認されていない。現在、広島県内海域でも生息は確認されているが、頻繁に目にすることができる種とはいえない。近世・近代には積極的に採取されたと考えられる。生食または乾製品として美味で、貝柱が主に好まれて食される。現在、貝柱と言えばホタテガイのものが全国に流通するが、ホタテガイは西日本には生息していないことから、当時イタヤガイは西日本では貴重な食材であったと推測される。また、貝殻はその形態から杓子や容器として利用されたと考えられる。

マガキ 土坑からマガキの左殻と考えられる破片が1点出土している。破片のため正確な大きさは不明であるが殻長50mm程度のものである。マガキは、汽水性内湾の潮間帯から潮下帯の砂礫底や泥底に生息し、岩礁に付着したりカキ礁を形成する。瀬戸内海沿岸の遺跡では、縄文時代から出土が確認される種で、比治山貝塚や中山貝塚では主体となる種ではないものの、一定量の出土が認められる。マガキの養殖は16世紀半ばに始まったとされる（広島市郷土資料館2013）が、本遺跡出土量から判断すると、マガキの積極的な搬入と利用は認められない。広島城関連遺跡においても出土は確認されているが多いとは言

えない。しかし、1805年に四日市宿の造酒屋・角屋に宿泊した太田南畝が、海田の牡蠣を肴に西条酒を味わったことが、「小春紀行」に記されており（財団法人東広島市教育文化振興事業団編 2007）、海田からカキが運ばれてきたことが読み取れる。

イワガキ 表採資料であるが、殻長 95.6 mmを測る右殻が 1 点確認されている。潮間帯の岩礁に生息する。瀬戸内海では福山市にある洗谷貝塚（縄文後期）で出土が報告されている（吉岡 1960）⁽¹⁾。広島城法務地点では確認されていない。イワガキは、潮間帯の岩礁に生息するが、外洋に面したやや水深が深い場所あるいは波の高いところに多く、沿岸部でも珍しいものが内陸部に運ばれているといえよう。

ミルクイ 土坑、トレンチ 1 などから計 3 点出土している。いずれも破片であるため正確な大きさは不明であるが、殻長 130 mmの現生標本と同大である。内湾の潮間帯下部から水深 20m の泥底に生息する。縄文時代の遺跡からの出土はまれであるが、広島城法務地点と太田川地点では少量の出土が確認される。イワガキ同様に複数確認された意味は大きい。

マテガイ 一つの土坑からまとめて 21 点出土している。殻長 50 から 60 mm程度のもので、個体数は 10 個を数える。ほとんどがマテガイだと判断されるが、完形でないためか前縁がやや直角に裁断状を呈するようなものも存在し、アカマテガイが含まれている可能性もある。福山市松永に所在する下迫貝塚（縄文前期・中期）では、マテガイとアカマテガイの両種が確認されている（吉岡 1960）。マテガイが広島城太田川地点で 1 点のみ出土している。マテガイは、内湾の潮間帯中部の砂底や砂泥底に深く潜って生息している。海岸の干潟に開いた穴に塩を入れると貝が飛び出てくるため、容易に採集することができるが、当時どのように採取されていたかは不明である。マテガイが複数点まとめて確認されたことも貴重な報告例だといえる。

カガミガイ 2 点確認されている。1 点は殻高が 55 mmを測る。内湾の潮間帯下部から水深 60m 程度までの細砂底に生息し、干潟などで容易に採集できるものである。古くは縄文時代の遺跡から出土が確認され、比治山貝塚や中山貝塚でも報告が認められる。前述の広島城関連の 2 遺跡からも一定量出土している。

アサリ 土坑や遺構面で計 7 点が出土している。土坑からまとめて出土しているもので、

左右で合わせ貝となる個体は確認されなかった。殻長 20 から 28 mm 程度の小さなものである。内湾の潮間帯中部から水深 10m までの砂礫泥底に生息し、現在、稚貝が撒かれる場合もあるが、潮干狩りの主役ともいえる貝である。広島湾沿岸部の遺跡では、比治山貝塚からの出土が認められるが、それ以降の時代になると、中世や近世の遺跡での出土が目立つ。府中町に所在する古代から中世の城山北貝塚や石井城貝塚など複数の遺跡で確認されている（府中町 1977）。近世になると全貝類の中でも主体となるもので、広島城法務地点ではハマグリに次ぐ量が出土し、広島城太田川地点では最も多く確認されている種である。

アケガイ 土坑より 1 点のみ確認されている。水深 10 から 50m の砂底に生息する。アケガイはスタレガイに似るが、ちょうつがい（殻頂付近）に近い部分に輪肋が認められないことからアケガイと同定した。瀬戸内海にも生息するが、広島湾沿岸の遺跡からの出土例は本遺跡が初めてだと思われる。

ハマグリ 土坑やトレンチなどから計 11 点が出土している。殻長 38 から 47 mm のものを主体に、大きなもので殻長 74 mm を測るものが確認された。内湾の潮間帯下部から水深 20m までの砂泥底に生息する。広島県瀬戸内海沿岸部の遺跡では主体となる種で、比治山貝塚では 6 割以上を占める量が出土している。また、広島城法務地点では最も多く確認されている。ハマグリは複数遺跡から出土し、また各遺跡の出土量の多くを占めることから、縄文時代から近世までの長きにわたって、人々の暮らしを支えた瀬戸内海の家産資源であったことが読み取れるが、残念ながら現在ではほとんど見ることはできない。沿岸部の自然環境が、近代以降劇的に変わってしまったことを意味していると言える。

【淡水産貝類】

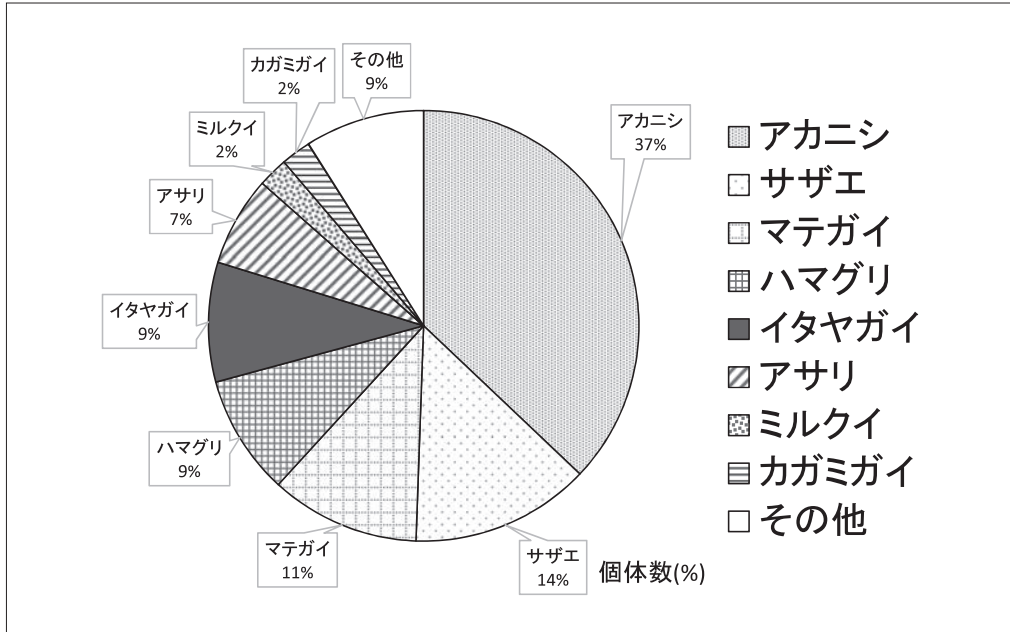
カワニナ 埋桶から 1 点のみ出土している。殻頂部は欠損しているが、殻幅 13.7 mm を測るものである。カワニナは、山間部の川や比較的冷たい水が安定して流れる細流に生息する。遺跡近くを流れる黒瀬川流域には現在もカワニナが生息しており、当時も容易に採集できたと考えられる。現在は食用とされていない。沿岸部の遺跡での出土報告はわずかであり、広島城法務地点で 1 点のみ確認されている。内陸部の遺跡では多く確認される場合があり、帝釈峡遺跡群（縄文時代主体）では主な出土貝類のひとつである（田中 1976）。ホタル（ゲンジボタル）の幼虫がカワニナを餌にすることが知られており、当時の黒瀬川流域でもホタルが舞うのを鑑賞できたのであろう。

マツカサガイ 土坑から1点のみ出土している。殻長が55mmを測るものである。マツカサガイは河川や池沼の砂底、砂礫底の流れのあるところに生息する。沿岸部の遺跡からの出土はまれであるが、琵琶湖にある粟津湖底遺跡第3貝塚や、島根県の宍道湖・中海側に流れ込む河川沿いに位置する西川津遺跡で報告が認められる（伊庭ほか1997、高安ほか1989）。食用となったかは不明であるが、ヤリタナゴやアブラボテがマツカサガイを産卵母貝とし、マツカサガイの幼生はヨシノボリ類やドジョウなどに寄生することが知られており（紀平ほか2003）、黒瀬川流域にマツカサガイが生息していたとするならば、ナタゴ類やヨシノボリ、ドジョウなども生息していた可能性が高い。江戸後期に編纂された「藝藩通志」に、四日市次郎丸村の物産として「どじょう」が記されていることから、宿屋でどじょう料理が提供された可能性も指摘できる。

3. 利用された貝類の特徴

内陸部に位置する四日市遺跡で出土する海産資源は、すべて遠隔地（沿岸部）から運び込まれたものであり、人為的に選択された個体だといえる。発掘調査によって、当時利用されたすべての貝類が検出されているわけではないことを前置きしたうえで、出土貝類組成や貝の大きさについて、沿岸部に位置する遺跡と比較しながら、四日市遺跡の出土貝類の特徴について考察したい。

確認された貝類を個体数で比較すると、アカニシ（33個：37%）が最も多く全体の約4割を占め、サザエ（12個：14%）、マテガイ（10個：11%）、ハマグリ（8個：9%）、イタヤガイ（8個：9%）、アサリ（6個：7%）と続く結果であった（第2図）。巻貝のアカニシとサザエで全体の半数を占め、二枚貝ではマテガイとイタヤガイが多い点の特徴としてあげられる。遺跡周辺のみで貝の採集をしていた可能性が高い縄文時代の遺跡においては、比治山貝塚（縄文後期から晩期）では、ハマグリ（70%）、マガキ（10%）、アサリ（10%）、ハイガイ（3%）、アカニシ（2%）で、ハマグリが主体を占める。また、馬取西貝塚（縄文後期）では、マガキ（50%）、ハイガイ（25%）、ハマグリとアカニシ（各10%）で、マガキやハイガイが多いのが特徴である（稲葉1963）。広島城法務地点では、遺構によって大きく組成が異なるが、全体としてはハマグリ（約50%）、アサリ（約40%）、ヤマトシジミ（約5%）、サザエ（約5%）であった。比治山貝塚と広島城跡法務地点の出土組成から、広島湾沿岸の遺跡で利用される貝はハマグリが主体であったことが分かる。以上のことから、アカニシを主体としてマテガイやイタヤガイを多く含む四日市遺跡の組成は特異であることが指摘できる。また、広島湾では、時代とともにハマグリが多く生息する環境から、アサリや

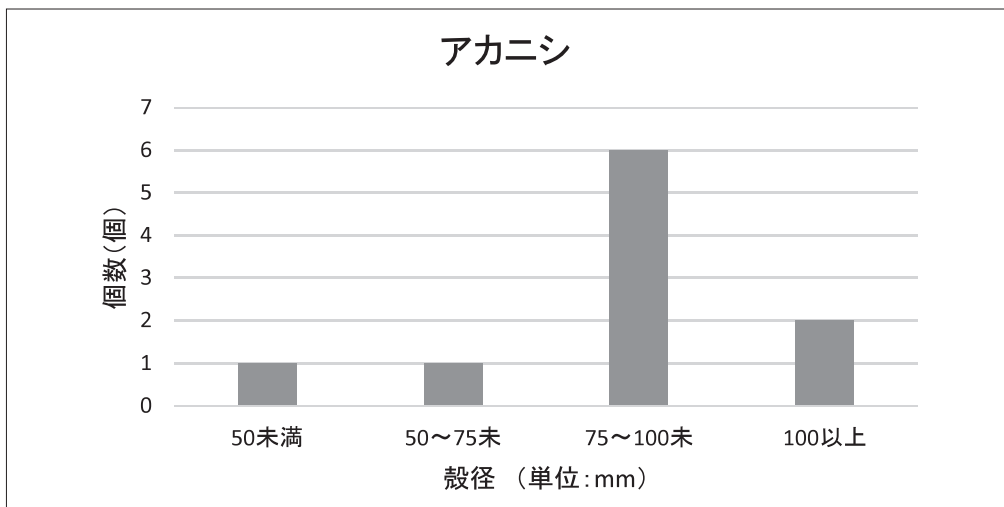


第2図 四日市遺跡出土貝類組成

ヤマトシジミが多くなっていく様相も読み取れる。

最も多く出土しているアカニシの大きさも注目される。広島城法務地点では、アカニシは全体の数%足らずしか確認されておらず、しかも殻幅約 60 mm程度の小型のものである。一方、四日市遺跡のものは、殻幅 75 から 100 mmのものが主体を占め、最も大きなものでは殻幅 122 mmの大きなものであった（第3図）。大きなものが選択され、運ばれてきた様子うかがえる。

上記の出土貝類の生息環境をまとめると、四日市遺跡出土の主な貝類は、④内湾泥底域（アカニシ）から⑤内湾砂底域（ハマグリやマテガイ）、⑥内湾岩礁域（サザエ）、⑧沿岸砂泥底域（イタヤガイ）で採集されたものであることが分かる（第2表）。同様に、縄文時代の比治山貝塚では、⑤が主体で③内湾干潟や④の採集環境があり、馬取西貝塚では、③を主体に④と⑤の環境が近くに存在したことが分かる。また、広島城法務地点に運ばれた貝類は、⑤が主体となり③と新たに②河口域や⑥で採集された貝類が利用されていたことがうかがえる。言い換えると、広島湾は縄文時代から近世にかけて、ハマグリが生息する砂底域の広がりから、ヤマトシジミが生息する河口域や干潟が形成されていったことを示していると言える。実際に、中世以降の新開地開発によって、広島湾は狭まり海岸線が遠くなっていくことが記録されている（広島市史編修委員会 1955）。



第3図 四日市遺跡出土アカニシの大きさ

第2表 四日市遺跡出土貝類の生息環境区分

位置	淡水	汽水	内湾水					沿岸水	
	河川上・中流	河口	湾奥部	湾中央		波食台	湾口部	湾外	
底質	砂泥質	砂泥質	砂泥質	シルト～泥質・岩礁	砂質	岩礁・カキ礁	砂礫質	砂質	岩礁
記号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
分類	河川	感潮域	干潟	内湾泥底域	内湾砂底域	内湾岩礁底	内湾砂礫底	沿岸砂泥底	外海岩礁底
種	カワニナ マツカサガイ		イボキサゴ アサリ* マガキ**	アカニシ アカガイ ミルクイ	ハマグリ マテガイ カガミガイ ツメタガイ アサリ*	サザエ*** マガキ**	イワガキ	イタヤガイ アケガイ	サザエ***

■ 主体を占める種。太字は多い種。
*, **, *** は生息環境が複数域にわたるもの

四日市遺跡出土の貝類は、④内湾泥底域を主体とすることや、⑧の湾外の沿岸域の貝も含まれること、③の干潟に生息するものは少量であることなどから、広島城法務地点に運ばれた貝類とはやや採集場所が異なる可能性が指摘できる。また、イワガキ、ミルクイ、マテガイは、沿岸部の遺跡でも珍しい種であり、宿場町という物資流通が盛んな場所の特徴、あるいは海産資源利用の特異性として指摘することができる。内陸部に運ばれた海産資源は、何らかの意味を持った人間活動に伴う証拠品であり、四日市遺跡の出土資料は、当時の流通や食文化を明らかにするうえで価値が高いものと言える。

4. 近世・近代の食料資源の流通—四日市遺跡の貝類はどこから運ばれたのか—

四日市遺跡から出土した貝類は、その多くが海産の貝類である。豊富な海産魚類も多く運び込まれている（石丸 2007）。それでは、それらの海産物はどこから運ばれてきたのだろうか。遺跡の立地からみると、瀬戸内海の家産物が運ばれた可能性が高いことが見て取れる。前述の「小春紀行」に記された海田の牡蠣からも、西国街道を通過して海田の沿岸部で採集された貝が運ばれたであろうことも読み取れる。また、海産魚類の炭素・窒素同位体分析によって、四日市遺跡に運ばれたマダイやクロダイなどの海産魚類は瀬戸内海産であることが、理化学分析の結果によっても示されている（石丸ほか 2008）。

以上のことから、四日市遺跡に運ばれた海産貝類は、瀬戸内海産であることは確実であろう。しかし、これまでに記した広島湾沿岸部に位置する広島城関連遺跡の出土貝類の様相とはやや異なることから、両者では貝類の産地あるいは入手のシステムが異なっていた可能性がある。同一時期の遺構で比較する必要があるが、四日市遺跡で貝類の主体を占めるアカニシは大きなものが多く、広島城跡法務地点出土のものは小型で出土量もわずかである点が異なっている。また、広島城跡法務地点では非常に少ない、あるいは出土していないマテガイやイワガキ、アケガイが確認される点も大きく異なっている。出土していない種や少ないものについては、意図的に持ち込まなかったと理解することもできるが、豊富にあるにもかかわらず利用できなかったのであれば、その理由を考える必要がある。広島城跡法務地点では、ハマグリが最も多く出土しており、アサリがそれに次ぐ傾向がうかがえるが、それらは四日市遺跡を代表する種とは言えない。

また、カキ類については、16 世紀にすでに養殖が始まったとされるが、広島城跡では法務地点も太田川地点でも出土量は少ない。また、城下町内で頻りに食されるまで容易に入手できるものではなかったのかもしれない。四日市遺跡においても、マガキとイワガキがわずかに確認されているに過ぎないが、海田の牡蠣が食されたことが文献に記されていることから、沿岸部から運ばれるカキ類が特別な食材として扱われていた可能性がある。

それでは、大きなアカニシやマテガイなどは、どの海域で採集されたものなのだろうか。四日市遺跡から距離的に海に近いのは安芸津方面であるが、18 世紀後半には三津（安芸津）と西条四日市を結ぶ「三津小往還」が整備されていた記録が残されている（安芸津町史編さん委員会 2011）。「三津小往還」は、三津村に設置された藩の蔵所へ賀茂郡の村々が年貢米を納入する場合に利用されたとみられることから、有力な流通ルートといえる。よって、現在の安芸津、風早、安浦、吉名などの沿岸部で採集された貝類が、四日市宿に運ばれていた可能性が高い。

四日市遺跡では、マダイやブリ属、コチ、ヒラメなどの豊富な海産魚類も出土しているが、これらの中には種が特定できていない魚も含まれており、アカニシやマテガイ、イタヤガイ、イワガキなど、広島湾側では入手が困難な珍しいものが好まれる文化があったのかもしれない。

以上のように、四日市遺跡出土の貝類を分析した結果、沿岸部の遺跡と比較して貝類組成が特異であることが示され、広島城跡などが所在する広島湾で採集されたものではなく、安芸津沿岸部で採集された貝類が、四日市遺跡に運ばれた可能性を指摘した。また、市宿（宿場町）という場所において、そこに暮らす人々の日常の食事と旅人に提供する料理では異なる食材を利用していた可能性も指摘できる。将来、その他の市宿関連遺跡で発掘調査が行われることを望み、またそこから当時の食文化をより具体的に読み取ることができる良好な動物遺存体資料が発見されることを期待する。

謝辞

本稿で取り扱った四日市遺跡出土の貝類は、東広島市出土文化財管理センター所蔵資料であり、許可を得て実見と計測ならびに掲載を行った。また、資料の計測と写真撮影においては、中島妙子氏に協力いただいた。記して心より感謝申し上げます。

注

(1) 吉岡 (1960) にイワガキが報告されているが、のちの発掘調査報告書の小都 (1976) では報告は認められない。

参考文献

安芸津町史編さん委員会 2011 『安芸津町史』

石垣敏之・出野上靖・田邊展久・滝沢亮・小池聡・粕谷隆・福波憲吾・堀内秀樹 2004 『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰー第1～4次調査ー』文化財センター発掘調査報告書第40冊、財団法人東広島市教育文化振興事業団

石垣敏之・長石紀子・長友美徳・中溝理恵・滝沢亮・有馬多恵子・小池聡・福波憲吾・堀内秀樹・三宅紹宣 2005 『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅱー第5・6次調査ー』文化財センター発掘調査報告書第43冊、財団法人東広島市教育文化振興事業団

石丸恵利子 2007 「西条盆地の動物遺存体と骨利用」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ、広島大学埋蔵文化財調査室、pp.539-548.

石丸恵利子・海野徹也・米田穰・柴田康行・湯本貴和・陀安一郎 2008 「海産魚類の産地同定からみた水産資源の流通の展開ー中四国地方を中心とした魚類遺存体の炭素・窒素同位体分析の視角からー」『考古学と自然科学』57、pp.1-20.

石丸恵利子 2009 「広島城下町の動物資源利用ー広島城跡広島法務総合庁舎地点出土の動物遺存体ー」『広島城跡法務総合庁舎地点ー広島市中区上八丁堀所在ー』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第16集、財団法人広島市文化財団、付編3-1-pp.1-48.

稲葉明彦 1963 「馬取貝塚出土の動物」『広島県文化財調査報告』第4集、広島県教育委員会、pp.83-88.

稲葉明彦 1971 「大田貝塚出土の貝類」『広島県文化財調査報告』第9集、広島県教育委員会、pp.51-59.

稲葉明彦 1982 『瀬戸内海の貝類』広島貝類談話会

伊庭功・瀬口眞司・稲葉正子・中川治美ほか 1997 『粟津湖底遺跡第3貝塚（粟津湖底遺跡Ⅰ）』琵琶湖開発

事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
 岩本正二・福島政文・下津間康夫・鈴木康之・バリノ・サーヴェイ株式会社・佐々木憲一 1995『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅳ、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編、広島市教育委員会
 奥谷喬司編著 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
 木谷麻衣子・篠原芳秀・増田晴美・和田崇志 2006『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅳ－第8～10次調査－』文化財センター発掘調査報告書第52冊、財団法人東広島市教育文化振興事業団
 紀平肇・松田征也・内山りゅう 2003『日本産淡水貝類図鑑』①琵琶湖・淀川産の淡水貝類、株式会社ピーシーズ
 黒澤一男 2006「広島城跡太田川河川事務所地点の動物遺体同定」『広島城跡太田川河川事務所地点－広島市中区八丁堀所在－』財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第15集、財団法人広島市文化財団、pp.271-315.
 高安己・角館正勝 1989「西川津遺跡弥生層出土の貝類について」『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3）』島根県土木部河川課・島根県教育委員会、pp.273-292.
 田中正昭 1976「帝釈観音堂洞窟遺跡出土の動物遺体概報」『帝釈峡遺跡群』帝釈峡遺跡群発掘調査団、pp.201-209.
 出野上靖・中山学・丸本陽子 2006『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅲ－第7・8（C区）次調査－』文化財センター発掘調査報告書第48冊、財団法人東広島市教育文化振興事業団
 中村信一 2001『学研の図鑑』貝、株式会社学習研究社
 東広島市教育委員会 2007『安芸西条四日市遺跡－その調査成果と未来－』
 広島市郷土資料館（財団法人広島市未来都市創造財団）2013『干潟の恵み－カキとノリの物語－』広島市郷土資料館企画展図録
 広島市史編修委員会編 1955『概観広島市史』広島市役所
 府中町史編さん専門委員会 1977『安芸府中町史 第二巻 資料編』広島県安芸郡府中町
 復刻藝藩通志刊行会 1963『復刻 藝藩通志 第二巻』
 望月賢二監修・魚類文化研究所編 1997『図説魚と貝の大事典』柏書房
 吉岡郁夫 1960「備後地方貝塚の貝類（1）」『ちりぼたん』1-1

Consideration of the shellfish use in the early modern times post-town Yokkaichi site.

Eriko ISHIMARU

Yokkaichi site is post-town located in Saijo basin of Higashihiroshima city. Yokkaichi post-town was known to exist by illustrated houses map and historical records, specific aspects by excavation revealed. Though it is in the inland, a lot of marine products are excavated. In this paper, I report the characteristics of the excavated shellfish, to discuss the distribution of marine products in the post-town.

As a result of the analysis, 16 kinds of shellfish have been identified, and the most was marine shellfish, and these species are also rare in the sites of the coastal areas. Features of shellfish composition is to occupy overall half in rock shell (*Rapana venosa*) and horned turban (*Turbo cornutus*), and to be followed by razor shell (*Solen strictus*) and scallop (*Pecten albicans*). It can be pointed out to be different from the sites of Hiroshima Bay area in the feature of the shellfish composition. It is also a specific point that a lot of big rock shells are carried to the Yokkaichi site.

The specificity of the excavated shellfish is a characteristic of post-town located in the inland area, and it is considered to indicate that the ingredients of the food to be provided to the daily diet of the people living there and travelers were different. Additionally, although in the literature has been left a record that ate the oysters of Kaita(Hiroshima Bay area) in the Yokkaichi post-town, the distribution route of seafood is likely to be Mitsu(current Akitsu area), because Mitsu Shou-okan starting from Mitsu to Saijyo Yokkaichi was used in those days.

It was possible to report the interesting marine shellfish use in the early modern times post-town located in the inland.

Keywords: Yokkaichi post-town, early modern times, inland, marine shellfish, distribution

第3表 四日市遺跡出土貝類観察一覧

NO.	調査区	遺構番号	旧遺構NO	遺構	時期	報告	調査区	記号	種名
1	H029-1-B	104	SK61	—		報-40	H029-1-B	37-B ₂ 325	アカニシ
2	H029-1-B	104	SK61	—		報-40	H029-1-B	37-B ₂ 325	サザエ
3	H029-1-B	41	SF01	—		報-40	H29-1-B	44-B ₂ 438	アカニシ
4	H029-1-B	41	SF01	—		報-40	H29-1-B	44-B ₂ 438	サザエ
5	H029-1-B	103	SK60	土坑		報-40	H029-1-B	35-B ₂ 305	アカニシ
6	H029-2-A	146	SB4 3畳ドキグン	—		報-40	H029-2-A	3-B ₂ 40	ハマグリ
7	H029-2-A	257	SK121	埋桶		報-40	H029-2-A	30-B ₂ 220	サザエ
8	H029-2-A	257	SK121	埋桶		報-40	H029-2-A	30-B ₂ 220	サザエ
9	H029-2-A	257	SK121	埋桶		報-40	H029-2-A	30-B ₂ 220	サザエ
10	H029-2-A	257	SK121	埋桶		報-40	H029-2-A	30-B ₂ 220	イタヤガイ
11	H029-2-A	257	SK121	埋桶		報-40	H029-2-A	30-B ₂ 220	カワニナ
12	H029-2-B	276	SK140	埋壘		報-40	H029-2-B	30-B ₂ 313	アカニシ
13	H029-2-B	249	SK113		18末～19初頭	報-40	H029-2-B	26-B ₂ 269	イタヤガイ
14	H029-2-B		D2区	—		報-40	H029-2-B	42-B ₂ 540	アカニシ
15	H029-4-2A		北2面			報-40	H029-4-2A	16-B ₂ 157	サザエ
16	H029-4-2B		南北Tr内	—		報-40	H029-4-2B	1-C25	ハマグリ
17	H029-4-2B		Tr1	—		報-40	H029-4-2B	1-C16	ミルクイ
18	H029-4-2B		表土	—		報-40	H029-4-2B	5-C56	アカニシ
19	H029-4-2B		表土	—		報-40	H029-4-2B	5-C56	ハマグリ
20	H029-4-2D	719	SK-38	埋桶		報-40	H029-4-2D	11-B ₂ 125	イタヤガイ
21	H029-4-2D	695	SK14	土坑	18末～19初頭	報-40	H029-4-2D	4-B ₂ 66	アカニシ
22	H029-4-2D	695	SK14	土坑	18末～19初頭	報-40	H029-4-2D	4-B ₂ 66	ハマグリ
23	H029-4-2D	736	SK55	埋桶		報-40	H029-4-2D	4-B ₂ 184	アカニシ
24	H029-4-2E	KATU	500～599			報-40	H029-5	2-C28	カガミガイ
25	H029-4-2E	KATU	500～599			報-40	H029-5	2-C28	カガミガイ
26	H029-4-2E	KATU	500～599			報-40	H029-5	2-C28	ハマグリ
27	H029-4-2E		表採	—		報-40	H029-4-2E	4-C49	イワガキ
28	H029-4-2E	1563～1564	SK70	土坑	19世紀	報-40	H029-4-5	21-B ₂ 295	アカニシ
29	H029-4-2E	1563～1564	SK70	土坑	19世紀	報-40	H029-4-5	21-B ₂ 295	アカニシ
30	H029-4-2E(IBA)	SB02	報1402号		近・現代	報-40	H029-5	1-B ₂ 11	アカニシ
31	H029-4-2E(IBA)	SB02	報1402号		近・現代	報-40	H029-5	1-B ₂ 11	ハマグリ
32	H029-4-C		表採	—		報-40	H029-4-2C	4-C49	サザエ
33	H029-4-C	607	SK17	—	18末～幕末・明治初頭	報-40	H029-4-C	7-B ₂ 88	ミルクイ
34	H029-4-C	607	SK17	—	18末～幕末・明治初頭	報-40	H029-4-C	7-B ₂ 88	マツカサガイ
35	H029-4-C		表土	—		報-40	H029-4-2C	3-C38	ミルクイ
36	H029-4-C	627	SK38	池	幕末	報-40	H029-4-2C	9-B ₂ 132	イタヤガイ
37	H029-5-B	2360	II 埋ガメ2	土坑		報-43	H029-5-B II (9)	20-B ₂ 91	アカニシ
38	H029-5-D		北側部第3～4層			報-43	H029-5-D(9)	1-C5	サザエ
39	H029-5-D	3948	SK12	土坑		報-43	H029-5-D(8)	5-B ₂ 51	アカニシ
40	H029-5-D	2422	桶01	土坑		報-43	H029-5-D(9)	37-B ₂ 245	アカニシ
41	H029-5-D	2271	SK09	土坑	19世紀中葉	報-43	H029-5-D(9)	14-B ₂ 88	イタヤガイ
42	H029-5-D	2271	SK09	土坑	19世紀中葉	報-43	H029-5-D(9)	14-B ₂ 88	イタボガキ科
43	H029-5-D	2409	II 4号埋ガメ	土坑		報-43	H029-5-D(9)	14-B ₂ 283	アカニシ
44	H029-5-E	3863	SK18	土坑	—	報-43	H029-5-E(8)	9-B ₂ 64	アカニシ
45	H029-5-E	3856	SK10		明治～大正 (M27鉄道)	報-43	H029-5-E(8)	7-B ₂ 48	アカニシ
46	H029-5-E	3856	SK10		明治～大正 (M27鉄道)	報-43	H029-5-E(8)	7-B ₂ 48	アカニシ

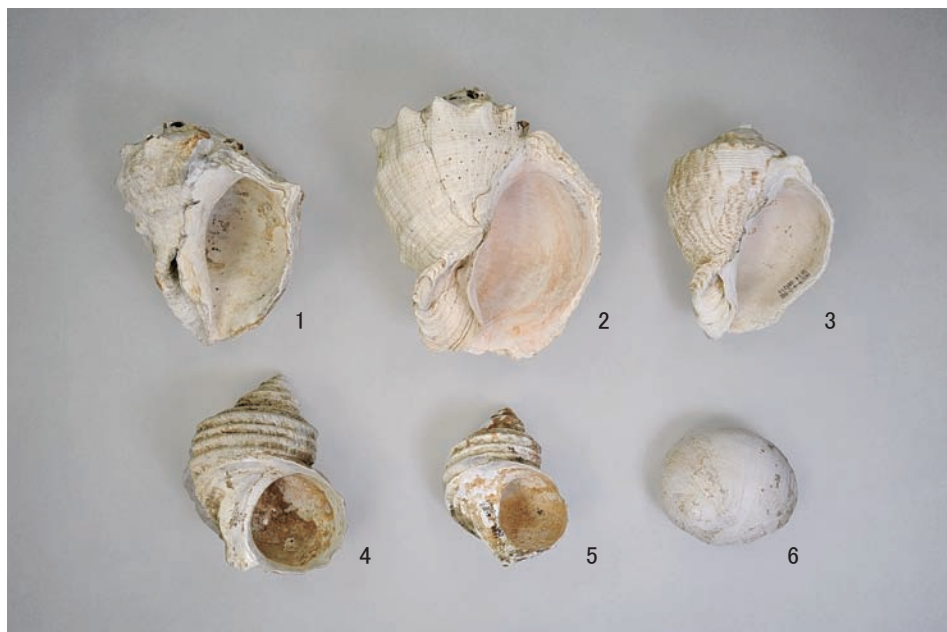
左右	部分	殻長	殻高	殻幅(径)	蓋長径	蓋短径	備考
-				101.16			殻軸欠損あり
-	殻体破片						
-	殻軸破片						
-	殻体部破片						
-	殻軸先端部欠損			50.36			
不明	破片						破片2
-	殻体						やや大型
-	蓋					32.9	
-	蓋					34.52	蓋短径は復元値
右?	破片						
-				13.74			
-	殻体破片						
左	一部欠損。色はよく残る		98.08				
-	殻体+殻軸						大型、破損のため計測不可
-	ほぼ完形	81.16		59.35			
不明	殻縁部破片						
左	前縁部破片						殻長130mmと同大
-	殻軸破片						
左	殻頂部破片						
左	2/3残		88				内面全体的に腐滅顕著
-	ほぼ完形	100.82		76.09			
右	殻頂部欠損	73.76					やや欠損のため計測値はやや小さく復元か
-	一部欠損	113.73					
右	縁辺やや欠損		55				
不明	殻縁部破片						
左		38	34				縁辺欠損のため、計測値はいずれも復元
右		96.5	113.24				
-	殻軸	115以上		殻軸から唇部まで92mm			記録紙2枚あり、A地区の記載も
-	殻軸	110以上		殻軸から唇部まで85mm以上			記録紙2枚あり、A地区の記載も
-	殻体破片						
左	殻頂破片						
-	蓋				40.86	35.87	外側面欠損あり、計測は復元
右	殻頂部破片						殻長130mmと同大
右	ほぼ完形	54.68	33.99				
不明	縁辺破片						
左		100.76	84				
-	殻軸破片						
-		96.05					殻体外側面欠損
-	殻頂部欠損			122.44			
-	殻軸破片						計測不可、殻径100mm以上の大型と考えられる
左		82	61.7				
左							イワガキか?
-	殻体破片						
-	殻軸破片						
-	殻軸	126.22					
-	ほぼ完形、殻唇部欠損	86.06	69.47				

第3表 四日市遺跡出土貝類観察一覧

NO.	調査区	遺構番号	旧遺構NO	遺構	時期	報告	調査区	記号	種名
47	H029-5-E	3856	SK10		明治～大正 (M27鉄道)	報-43	H029-5-E(8)	7-B ₂ 48	ハマグリ
48	H029-5-E	3856	SK10		明治～大正 (M27鉄道)	報-43	H029-5-E(8)	7-B ₂ 48	ハマグリ
49	H029-5-F	3699	SK43	埋桶		報-43	H029-5-F(8)	9-B ₂ 112	イタヤガイ
50	H029-5-3F	1101	SD1	溝	6-2区1面:	報-43	H029-5-3F(6-2)	1-B ₂ 4	ツメタガイ
51	H029-5-G		2面埋土			報-43	H029-5-G(7)	6-C25	アカニシ
52	H029-5-G	3341	SK34	埋甕		報-43	H029-5-G(7)	16-B ₂ 135	ハマグリ
53	H029-5-G	3470	SK166	土坑	18後半	報-43	H029-5-G(7)	47-B ₂ 380	アカニシ
54	H029-5-G	3430	SK127	焼土?		報-43	H029-5-G(7)	36-B ₂ 307	アカニシ
55	H029-5-G	3437	SK133		幕末 19C～前半 (江戸内)	報-43	H029-5-G(7)	39-B ₂ 319	アカニシ
56	H029-5-G		SG1		19初頭	報-43	H029-5-G(7)	58-B ₂ 483	アカニシ
57	H029-5-G		SG1		19初頭	報-43	H029-5-G(7)	58-B ₂ 483	サザエ
58	H029-5-H	2930	SK55	土坑	明治30～大正	報-43	H029-5-H(7)	46-B ₂ 245	アカニシ
59	H029-5-H	2930	SK55	土坑	明治30～大正	報-43	H029-5-H(7)	46-B ₂ 245	マガキ
60	H029-5-H	2930	SK55	土坑	明治30～大正	報-43	H029-5-H(7)	46-B ₂ 245	アカニシ
61	H029-5-H	2879	SK1	土坑	幕末	報-43	H029-5-H(7)	24-B ₂ 90	サザエ
62	H029-5-H	3027	SK174	石組み 井戸	～大正期	報-43	H029-5-H(7)	81-B ₂ 470	アカニシ
63	H029-5-H		2面埋土			報-43	H029-5-H(7)	5-C24	アカニシ
64	H029-5-H		2面埋土			報-43	H029-5-H(7)	5-C24	アサリ
65	H029-5-H	2937	SK61	土坑		報-43	H029-5-H(7)	49-B ₂ 270	二枚貝?
66	H029-5-H	3013	SK156			報-43	H029-5-H(7)	72-B ₂ 427	アカニシ
67	H029-5-I		2区		—	報-43	H029-5-I(6-1)	2-C25	サザエ
68	H029-5-I		1面北半			報-43	H029-5-I(7)	8-C21	アカニシ
69	H029-5-I	2642	SK1	池・埋甕		報-43	H029-5-I(7)	11-B ₂ 37	イタヤガイ
70	H029-5-I	2642	SK1	池・埋甕		報-43	H029-5-I(7)	11-B ₂ 37	ハマグリ
71	H029-5-I	2642	SK1	池・埋甕		報-43	H029-5-I(7)	11-B ₂ 37	ハマグリ
72	H029-5-I	2677	SK40	土坑	—	報-43	H029-5-I(7)	34-B ₂ 154	アカニシ
73	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アカニシ
74	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アカニシ
75	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アサリ
76	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アサリ
77	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アサリ
78	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アサリ
79	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アサリ
80	H029-5-I	2699	SK63-A		大正～昭和初期	報-43	H-029-5-I(7)	42-B ₂ 192	アサリ
81	H029-5-I	2671	SK34		明治～	報-43	H029-5-I(7)	30-B ₂ 134	アカガイ
82	H029-5-I	2671	SK34		明治～	報-43	H029-5-I(7)	30-B ₂ 134	マテガイ
83	H029-5-I	2671	SK34		明治～	報-43	H029-5-I(7)	30-B ₂ 134	アケガイ
84	H029-5-I	2671	SK34		明治～	報-43	H029-5-I(7)	30-B ₂ 134	イボキサゴ
85	H029-5-I	2665	SK26		明治	報-43	H029-5-I(7)	30-B ₂ 113	アカニシ
86	H029-8C(11)	5351	S5351	井戸	2面:17後半～18	報-43	H029-8-C(11)	9-B ₂ 67	イタヤガイ
87	H029-8C(11)	5351	S5351	井戸	2面:17後半～18	報-43	H029-8-C(11)	9-B ₂ 67	イタヤガイ
88	H029-7(10)	4151	S151	埋桶	2面:17後半～18	報-48	H029-7(10)	36-B ₂ 234	アカニシ
89	H029-7(10)	4283	S283	溝	19後葉～20世紀	報-48	H029-7(10)	49-B ₂ 381	アカニシ
90	H029-7(10)	4049北	S101	溝	17後半～18前半頃	報-48	H029-7(10)	8-B ₂ 65	サザエ

左右	部分	殻長	殻高	殻幅(径)	蓋長径	蓋短径	備考
左右	合わせ貝	45.27	38.97				
左右	合わせ貝		40.03				
右	縁辺破片						
-	ほぼ完形	36.13		67.4			
-	殻体破片						
右	縁辺部欠損						計測不可
-	殻体+殻軸						破損のため計測不可(大型のもの)
-	殻体破片						
-	殻軸+殻体、殻唇部欠損	約127					
-	欠損有	約73	58.68				
-	殻軸、2個体か?						2点。1点は大型
-	殻体部破片						
左							
-		131.43		92.63			殻軸先端と殻唇部やや欠損あり
-	殻軸破片						
-	殻体破片						
-	殻体破片						
左		20.86	16.88				
不明	破片						アカガイか?
-							
-		74.26		61.56			殻唇部欠損あり
-	殻体一部欠損	64.75		43.32			
左	中央付近破片						
右	殻頂破片						殻長4cmまでか
左	殻頂破片						殻長4cmまでか
-	殻体破片						大型
-	ほぼ完形(殻唇部欠損)	98.6		約70.0			
-	殻軸						
右			24.91				
右		22	17.55				
右		23.02	17.58				
右							
左		27.52					
左		23.47					
右		90.64	86.39				
左右		残存:58.03,61.9 52.34,58.13,59.0 5,50.53	14.16,12.93,13.8 2,13.56,15.55,13. 18				21点中6点の計測値を記入。左右同数あり。多くがマテガイだと考えられるが、一部アカマテガイを含む可能性もある
右		62.62	42.01				
-		9.67		14.16			
-	殻軸および破片						
右	殻縁部						
右	ほぼ完形だが、縁辺が欠けているので殻長はもっとあったはず	97.55	95.2				
-	殻体+殻軸						破損のため計測不可(大型のもの)
-	ほぼ完形	102		90.55			
-	蓋				35.91	33.03	

図版 1



四日市遺跡出土貝類①

1～3 アカニシ 4・5 サザエ 6 ツメタガイ



四日市遺跡出土貝類②

7 カワニナ 8 イボキサゴ



四日市遺跡出土貝類③

9・10 イタヤガイ (9: 右殻 10: 左殻) 11 アカガイ 12 イガワキ
13～15 ハマグリ



四日市遺跡出土貝類④

16 カガミガイ 17 マガキ 18 マツカサガイ 19 アケガイ
20 ミルクイ 21～24 アサリ 25～27 マテガイ